

- 準同型定理の応用として、様々な行列に関する命題が得られることを知る.
- 不変部分空間による直和と対角化の関係を知る.

補題：体 k 上の有限生成線形空間 V の部分空間 W について：

- (1) W も有限生成.
- (2) $\dim W \leq \dim V$ で, $\dim W = \dim V \Leftrightarrow W = V$. また $\dim(V/W) = \dim V - \dim W$.
- (3) w_1, \dots, w_t が W の基底で, $[v_1], \dots, [v_s]$ が V/W の基底ならば, $w_1, \dots, w_t, v_1, \dots, v_s$ は V の基底.

注意： $\mathbb{Z} \supsetneq 2\mathbb{Z} \supsetneq 4\mathbb{Z} \supsetneq 8\mathbb{Z} \supsetneq \dots$ は「1次元」 \mathbb{Z} 加群の狭義減少列である (この講義では扱わない).

証明：(1) $V = \langle v_1, \dots, v_n \rangle$ とする. W が有限生成でないとする. $0 \neq \exists w_1 \in W$ で $\langle w_1 \rangle \subsetneq W$ より, $\exists w_2 \in W \setminus \langle w_1 \rangle, \dots$ と繰り返すと, これは無限に続けられて, 任意の $r \geq 1$ について, $w_1, \dots, w_r \in W \subseteq V$ は線形独立であることが確認できる. つまり $\forall r \geq 1, \dim V \geq r$.

(2) と (3) W の基底に v_1, \dots, v_s を付け加えて V の基底に延長すると, $\dim V = \dim W + s$ であり, $[v_1], \dots, [v_s]$ が V/W の基底であることが確認できる.

(4) $w_1, \dots, w_t, v_1, \dots, v_s$ が $\dim V = t + s$ を生成しているから.

系：体 k 上の有限生成線形空間 V, W の間の線形写像 $f : V \rightarrow W$ について：

- (1) f が単射 $\Rightarrow \dim V \leq \dim W$ で, $\dim V = \dim W$ なら f は同型.
- (2) f が全射 $\Rightarrow \dim V \geq \dim W$ で, $\dim V = \dim W$ なら f は同型.

証明： $V/\text{Ker } f \xrightarrow{\sim} \text{Im } f$ より, $\dim V = \dim \text{Ker } f + \dim \text{Im } f$.

- (1) f が単射 $\Leftrightarrow \text{Ker } f = \{0\}$ (環のときと同様) から従う.
- (2) f が全射 $\Leftrightarrow \text{Im } f = W$ から従う.

定理 (ランク標準形)： k を体とすると：

$$\forall A \in M_{m,n}(k), \exists! r \geq 0, \exists P \in \text{GL}_m(k), \exists Q \in \text{GL}_n(k), PAQ = \begin{pmatrix} E_r & O \\ O & O \end{pmatrix}.$$

証明： A に対応する $F_A : k^n \rightarrow k^m, \mathbf{x} \mapsto A\mathbf{x}$ において, 準同型定理より $\overline{F_A} : k^n / \text{Ker } F_A \xrightarrow{\sim} \text{Im } F_A$. $v_1, \dots, v_r \in k^n$ を $[v_1], \dots, [v_r]$ が $k^n / \text{Ker } F_A$ の基底になるように取ると, $F_A(v_1) = \overline{F_A}([v_1]), \dots, F_A(v_r) = \overline{F_A}([v_r])$ は $\text{Im } F_A = \text{Im } \overline{F_A}$ の基底である. これを k^m の基底に延長し, k^n の基底としては $\text{Ker } F_A$ の基底 (何でもよい) と v_1, \dots, v_r を並べたものを考える. これらの基底に関する F_A の表現行列は $\begin{pmatrix} E_r & O \\ O & O \end{pmatrix}$ になっている.

r の一意性について： $P'AQ' = \begin{pmatrix} E_{r'} & O \\ O & O \end{pmatrix}$ とすると, $\dim \text{Im } F_A = r'$ となる.

系： $\text{rank}(A) = \dim \text{Im } F_A$.

命題：行列積においては、片側逆の存在から、逆元の存在が従う： k を体、 $A \in M_n(k)$ について

- (1) $\exists B \in M_n(k), AB = E_n \Rightarrow BA = E_n$.
- (2) $\exists B \in M_n(k), BA = E_n \Rightarrow AB = E_n$.

証明：対応する $F_A, F_B : k^n \rightarrow k^n$ を考える。(1) は

$$\left(k^n \xrightarrow{F_B} k^n \xrightarrow{F_A} k^n \right) = \left(k^n \xrightarrow{\text{id}_{k^n}} k^n \right)$$

と言っている。これから F_B は単射、 F_A は全射が容易に分かる (以下の補題 (1),(2) を用いた)。よって F_A は同型なので (1page の補題 (2) を用いた)、 $F_A^{-1} = F_B$ なので $BA = E_n$ 。(2) も同様。

補題：写像 $X \xrightarrow{f} Y \xrightarrow{g} Z$ について

- (1) $g \circ f$ が単射 $\Rightarrow f$ は単射.
- (2) $g \circ f$ が全射 $\Rightarrow g$ は全射.
- (3) $g \circ f$ が単射 $\Leftarrow f$ と g は単射.
- (4) $g \circ f$ が全射 $\Leftarrow f$ と g は全射.

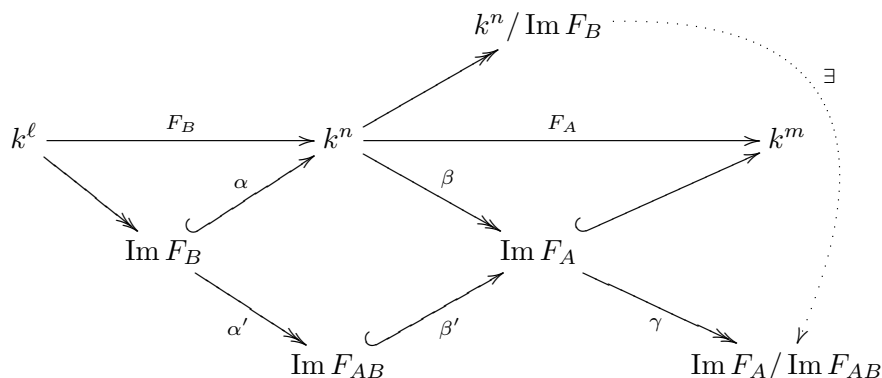
命題： k を体、 $A \in M_{m,n}(k), B \in M_{n,\ell}(k)$ について

$$\text{rank}(A) + \text{rank}(B) - n \leq \text{rank}(AB) \leq \min\{\text{rank}(A), \text{rank}(B)\}.$$

証明：最右辺は以下から明らか。

$$\text{Im } F_B = F_B(k^\ell) \xrightarrow{F_A} F_A(F_B(k^\ell)) \subseteq F_A(k^n) = \text{Im } F_A.$$

最左辺は、 $\text{rank}(A) - \text{rank}(AB) \leq n - \text{rank}(B)$ を示せばよく、そのために \exists の存在とその全射性を確認すればよい。普遍性を用いるために $\gamma \circ \beta \circ \alpha = 0$ を示したいが、それは図式の可換性 ($\beta' \circ \alpha' = \beta \circ \alpha$) から明らか ($\gamma \circ \beta' = 0$ だから $\gamma \circ \beta \circ \alpha = (\gamma \circ \beta') \circ \alpha' = 0$)。 $\gamma \circ \beta$ は全射なので (上の補題 (4) を用いた)、 $\overset{\exists}{\dashrightarrow}$ は全射 (上の補題 (2) を用いた)。



定義： k 線形空間 V の部分空間 V_1, \dots, V_r について

$$\sum_{i=1}^r V_i := \left\{ \sum_{i=1}^r v_i \mid 1 \leq \forall i \leq r, v_i \in V_i \right\} \subseteq V$$

は部分空間だが、これが直和とは、以下が成り立つことと定義する。

$$\forall v \in \sum_{i=1}^r V_i, \exists! v_1 \in V_1, \dots, \exists! v_r \in V_r, \sum_{i=1}^r v_i = v.$$

注意： $\bigcap_{i=1}^r V_i \subseteq V$ は部分空間だが、 $\bigcup_{i=1}^r V_i$ は部分空間とは限らない。

命題： $\sum_{i=1}^r V_i$ は直和 $\Leftrightarrow 1 \leq \forall j \leq r, (\sum_{i \neq j, 1 \leq i \leq r} V_i) \cap V_j = \{0\}$.

証明： (\Rightarrow) $\exists j, 0 \neq \exists w \in (\sum_{i \neq j} V_i) \cap V_j$ とする。適当な $v_i \in V_i$ を用いて $w = \sum_{i \neq j} v_i$ だが、 $\sum_{i \neq j} v_i - w = 0$ で矛盾が生じた。

(\Leftarrow) $v = \sum_{i=1}^r v_i = \sum_{i=1}^r v'_i$ のとき、 $\forall j, v_j - v'_j = \sum_{i \neq j} v'_i - v_i \in \{0\}$ より、 $v_j = v'_j$.

系： さらに $\forall i, V_i$: 有限生成、と仮定すると、次とも同値：

$v_1^{(i)}, \dots, v_{N_i}^{(i)}$ が V_i の基底ならば $v_1^{(1)}, \dots, v_{N_1}^{(1)}, \dots, v_1^{(r)}, \dots, v_{N_r}^{(r)}$ は $\sum_{i=1}^r V_i$ の基底

証明： (\Rightarrow) $v_1^{(1)}, \dots, v_{N_1}^{(1)}, \dots, v_1^{(r)}, \dots, v_{N_r}^{(r)}$ が $\sum_{i=1}^r V_i$ を生成することは明らか。 $\sum_{i=1}^r \sum_{j=1}^{N_i} c_j^{(i)} v_j^{(i)} = 0$ とすると、 $\forall i, \sum_j c_j^{(i)} v_j^{(i)} = 0$ から $\forall i, \forall j, c_j^{(i)} = 0$.

(\Leftarrow) $\exists j, (\sum_{i \neq j} V_i) \cap V_j \ni w \neq 0$ とし、 $w = \sum_{\ell=1}^{N_j} c_\ell^{(j)} v_\ell^{(j)} = \sum_{i \neq j} \sum_{\ell=1}^{N_i} c_\ell^{(i)} v_\ell^{(i)}$ と書く。「 $\forall \ell, c_\ell^{(j)} = 0$ 」ではなく、「 $\forall i \neq j, \forall \ell, c_\ell^{(i)} = 0$ 」でもない。一方、「中辺」 - 「右辺」 = 0 なので矛盾が生じた。

注意： $V_1 + V_2$ が直和 $\Leftrightarrow V_1 \cap V_2 = \{0\}$.

命題： k 線形空間 V の部分空間 V_1, V_2 が有限生成のとき

$$\dim V_1 + \dim V_2 = \dim(V_1 \cap V_2) + \dim(V_1 + V_2).$$

証明： $V_1 \cap V_2$ の基底 u_1, \dots, u_r を延長して、 V_1 の基底 $u_1, \dots, u_r, v_1, \dots, v_s$ と V_2 の基底 w_1, \dots, w_t を得たとする。以下を示せばよい。

主張： $u_1, \dots, u_r, v_1, \dots, v_s, w_1, \dots, w_t$ は $V_1 + V_2$ の基底である。

証明：生成することは明らか。 $\sum_{i=1}^r c_i u_i + \sum_{j=1}^s d_j v_j + \sum_{\ell=1}^t e_\ell w_\ell = 0$ とすると、 $\sum_{\ell=1}^t e_\ell w_\ell \in V_1 \cap V_2$ より、 $\forall \ell, e_\ell = 0$ 。よって $\forall i, c_i = 0$ かつ $\forall j, d_j = 0$ 。

注意： $V_1 \hookrightarrow (V_1 + V_2) \twoheadrightarrow (V_1 + V_2)/V_2$ という合成を φ とすると、 φ は全射で、 $\text{Ker } \varphi = V_1 \cap V_2$ 。よって準同型定理より

$$V_1/(V_1 \cap V_2) \xrightarrow{\sim} (V_1 + V_2)/V_2.$$

これから $\dim V_1 - \dim(V_1 \cap V_2) = \dim(V_1 + V_2) - \dim V_2$ と導出してもよい。

記法： $\sum_{i=1}^r V_i$ が直和のとき、 $\bigoplus_{i=1}^r V_i$ と書く。

定義： k 線形空間 V の自己線形 $f: V \rightarrow V$ について、部分空間 $W \subseteq V$ が f 不変 $\Leftrightarrow f(W) \subseteq W$ 。

注意： V が有限生成のとき、 W の基底 u_1, \dots, u_t を延長して v_1, \dots, v_s が得られたとすると、この基底に関する f の表現行列は、以下の形をしている。

$$\begin{pmatrix} f|_W \text{ の基底 } u_1, \dots, u_t \text{ に関する表現行列} & & & \\ & O & & * \\ & & \bar{f} \text{ の基底 } [v_1], \dots, [v_s] \text{ に関する表現行列} & \\ & & & \end{pmatrix}.$$

ここで $\bar{f}: V/W \rightarrow V/W$ は (商加群の普遍性によって) $\bar{f}([u]) = [f(u)]$ と定まる自己線形。

注意：同様に、 $W_1, \dots, W_r \subseteq V$ が f 不変で $\bigoplus_{i=1}^r W_i = V$ なら、 f の表現行列を

$$\begin{pmatrix} f|_{W_1} \text{ の表現行列} & \cdots & O \\ \vdots & \ddots & \vdots \\ O & \cdots & f|_{W_r} \text{ の表現行列} \end{pmatrix}$$

と出来る。特に $W_i = \{v \in V \mid f(v) = \alpha_i v\}$ となるとき、 f の表現行列は以下である。

$$\begin{pmatrix} \alpha_1 E_{\dim W_1} & \cdots & O \\ \vdots & \ddots & \vdots \\ O & \cdots & \alpha_r E_{\dim W_r} \end{pmatrix}$$

命題：体 k 上の有限生成線形空間 V の自己線形 $f: V \rightarrow V$ が対角化可能 $\Leftrightarrow \exists \alpha_1 \in k, \dots, \exists \alpha_r \in k, V = \bigoplus_{i=1}^r W_i$. ここで $i \neq j \Rightarrow \alpha_i \neq \alpha_j$ で、 $W_i := \{v \in V \mid f(v) = \alpha_i v\}$ 。

証明：(\Leftarrow): すぐ前で注意した。

(\Rightarrow): $1 \leq \forall i \leq r, 1 \leq \forall j \leq N_i, f(v_j^{(i)}) = \alpha_i v_j^{(i)}$ となる V の基底が取れたとすると、 $v_1^{(i)}, \dots, v_{N_i}^{(i)} \in W_i$ は線形独立である。以下の補題より、

$$\dim \bigoplus_{i=1}^r W_i = \sum_{i=1}^r \dim W_i \geq \sum_{i=1}^r N_i = \dim V$$

なので $\bigoplus_{i=1}^r W_i = V$ 。

補題： $\sum_{i=1}^r W_i = \bigoplus_{i=1}^r W_i$ 。

証明： $0 = v := \sum_{i=1}^r w_i$ のとき (ここで $w_i \in W_i$)、 $\forall i, w_i = 0$ を言う。 $f(v) = \sum_{i=1}^r \alpha_i w_i$, $f^2(v) = \sum_{i=1}^r \alpha_i^2 w_i$ と続けることで

$$0 = \begin{pmatrix} v \\ f(v) \\ \vdots \\ f^{r-1}(v) \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 & \cdots & 1 \\ \alpha_1 & \cdots & \alpha_r \\ \vdots & \ddots & \vdots \\ \alpha_1^{r-1} & \cdots & \alpha_r^{r-1} \end{pmatrix} \begin{pmatrix} w_1 \\ w_2 \\ \vdots \\ w_r \end{pmatrix}.$$

ここに現れる正方行列の $\det = \pm \prod_{1 \leq i < j \leq r} (\alpha_i - \alpha_j) \neq 0$ より、 $\forall i, w_i = 0$ 。

例： $A = \begin{pmatrix} 0 & 1 \\ 0 & 0 \end{pmatrix}$ とすると、 $F_A: k^2 \rightarrow k^2, \mathbf{x} \mapsto A\mathbf{x}$ は対角化不可能な自己線形写像。